

受け手による犯罪報道への評価（2）¹

Audience Evaluation of Criminal Reports（2）

大谷奈緒子	Naoko OTANI
四方 由美*	Yumi SHIKATA
北出真紀恵**	Makie KITADE
小川祐喜子***	Yukiko OGAWA
福田 朋実****	Tomomi FUKUDA

1. はじめに

これまでの犯罪報道研究においては、人権問題やプライバシー、報道の自由といった観点からの議論が中心となり、実証研究や効果に関する研究は十分でない指摘されてきた（牧野智和2012）。犯罪報道の実証的研究の中でも、とりわけ受け手に関する研究は多くはない。近年では、阪口祐介（2008）や大谷奈緒子ら（2016）の研究があげられる。これらは、G. ガーブナーの「培養仮説」の視点を援用するかたちで受け手調査を実施し、メディア接触と人々の犯罪不安の関連性の明確化を試みている。これらの調査結果からは、全体的には、メディア接触と人々の犯罪不安への関連性はみられていない（阪口2008、大谷ら2016）²。

こうした状況を踏まえて、筆者らは犯罪報道の数量的・質的分析を行い、当該領域における実証研究の蓄積に寄与してきた。前稿の「受け手による犯罪報道の評価」（『東洋大学社会学部紀要』第56-2号）においては、受け手の事件報道への評価として「事件が興味本位で伝えられている」「社会全体の治安悪化を感じさせる」「容疑者を犯人と決めつけている」「独自取材による報道が少ない」の意見が多い点を指摘した。また、「事件被害者のプライバシーや人権への配慮」についてはマイナスの評価、すなわち被害者のプライバシーや人権への配慮がされていないとする意見が多いという知見も得

* 四方由美 宮崎公立大学

*** 小川祐喜子 東洋大学

** 北出真紀恵 東海学園大学

**** 福田朋実 宮崎公立大学、東洋大学現代社会総合研究所

1 本研究は2016年～2019年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（研究代表者 四方由美）、研究課題「犯罪報道におけるジェンダー問題に関する実証的研究」の研究成果の一部を発表するものである。本研究の構成員は、共著者の他に、国広陽子（武蔵大学）。

2 ただし、属性や犯罪被害経験の有無（阪口2008）、犯罪の内容（「振り込め詐欺」といった身近な犯罪か、「凶悪犯罪」といった自分と距離のある犯罪か）によっては、メディア接触と人々の犯罪不安との関連性が確認されている（大谷ら2016）。

ている。このように、受け手である読者・視聴者が犯罪報道をどのように受容しているのかを知ることは、犯罪報道の実証的研究において議論を展開するうえで重要となろう。

そこで本稿では、前稿に続き、「マスコミ報道についての意識調査」³ (2018年5月) のデータの一部を用いて、受け手のメディア接触と犯罪報道の評価に関する分析を行い、受け手のメディア利用と報道評価の関連性について実証的に考察した。具体的には、「新聞」「テレビ」「インターネットニュース」への接触状況 (利用時間) と、「殺人事件報道への意見」「性犯罪 (強制わいせつ、強姦など) 事件報道への意見」「幼児虐待事件報道への意見」「事件別報道への意見」との関連性をみたものである。

2. メディア利用の実際

調査対象者 (n = 1,000) の平日1日あたりのメディア利用状況について概要をまとめる。まず、利用の実際を把握するために、利用時間別にカテゴリー化した。新聞は4カテゴリー (「30分未満」「30分～1時間未満」「1時間以上」「読まない」)、テレビは4カテゴリー (「2時間未満」「2時間～4時間未満」「4時間以上」「見ない」)、インターネットニュースは5カテゴリー (「30分未満」「30分～1時間未満」「1時間～2時間未満」「2時間以上」「見ない」) にそれぞれ分類した。

「新聞」(電子版購読も含む) の行為者率は51.7%であり、約半数は読んでいない。回答者 (n = 1,000) のうち、最も多いのは「30分未満」(38.0%) で、以下、「30分～1時間未満」(10.8%)、「1時間以上」(2.9%) となる。行為者 (n = 517) で換算すると、行為者の7割は「30分未満」である。性・年代別にみると、「読まない」と回答したのは、性別を問わず20代と30代に多く、6割を超える。特に、女性の20代の8割以上は読んでいない。他方、年齢が高くなるにつれて閲読率は高まり、男女とも70代の約8割は読んでいる。

「テレビ」の行為者率は94.0%であり、全体 (n = 1,000) の視聴時間は、「2時間未満」(45.1%) が最も多く、次いで「2時間～4時間未満」は33.1%、「4時間以上」の長時間視聴者は15.8%である。他方、「見ない」は6.0%であった。性・年代別でみると、「4時間以上」の長時間視聴者は、男性の70代以上、女性の50代以上で2割を超え、特に、女性の70代では3割を超えて多い。他方、「見ない」は男性に多い傾向にあり、男性の20代から50代までは「見ない」が1割を超える。ちなみに、

3 本調査は、調査会社マクロミルのウェブサイト上において、モニター登録している首都圏50キロ圏内の20歳以上79歳以下の男女を対象に実施した。調査対象者の内訳は、男性、女性それぞれ20歳代が83人、30歳代が83人、40歳代が84人、50歳代が84人、60歳代が83人、70歳代が83人 (男性：500人、女性：500人、合計1,000人) である。調査の項目は、「メディア接触」「基本属性」「犯罪報道に対する認識と被害経験」「マスコミやインターネットに対する意見」に加え、女性が係わる事件の報道評価を尋ねる項目として、「殺人事件の報道についての意見」「幼児虐待事件についての意見」「性犯罪事件についての意見」などから構成した (調査概要については、大谷ら2019)。

女性で「見ない」が1割を超える年代はない。

「インターネットニュース」の行為者率は93.5%である。利用時間をみると、「30分未満」が39.4%、「30分～1時間未満」が30.1%、「1時間～2時間未満」が15.1%、「2時間以上」が8.9%となり、「見ない」は6.5%である。性・年代別にみると、女性70代では「見ない」が1割を超えて僅かに多いものの、全体的な傾向としては、性・年代による大きな差はない。

以上の結果から、新聞の閲読率は低く、かつ、性・年代による差が大きい。最も利用されているメディアはテレビであるが、性・年代による利用時間の差が大きい。他方、インターネットニュースは性別、年代別にかかわらず広く利用されているメディアとして位置づけられる。

次に、各メディア相互の利用状況について確認したところ、メディア相互の利用において相関関係は認められない。“新聞とテレビ”の利用では、新聞を「30分～1時間未満」読む人のテレビ視聴時間が最も長く、「2時間～4時間未満」と「4時間以上」を合わせた“2時間以上”視聴する人が7割を超える。他方、全体の1割は新聞もテレビも利用しないと回答している。“新聞とインターネットニュース”では、新聞の「30分未満」の閲読者の約半数はインターネットニュースの利用も「30分未満」である。他方、新聞を「1時間以上」閲読する人の約4割はインターネットニュースを長時間利用すると回答している。“テレビとインターネットニュース”では、テレビを「見ない」と回答したうちの2割は、インターネットニュースを利用していない。また、テレビの視聴時間が長くなるほど、インターネットニュースを利用しない人の割合は徐々に高くなる。

これらの結果より、インターネットニュースは新聞やテレビに比べて、性・年代を問わず利用されているものの、新聞やテレビの代替としてインターネットニュースを利用するという利用形態は確認できない。むしろ、メディアをあまり利用しない人と多様なメディアを重層的に利用する人に2極化する様相を呈している⁴。

3. メディア利用別 受け手の犯罪報道への意見

前稿(大谷ら、2019)では、殺人事件、性犯罪事件、幼児虐待事件の報道に対する意見について、「とてもそう思う」は2点、「まあそう思う」は1点、「どちらともいえない」は0点、「あまりそう思わない」は-1点、「全くそう思わない」は-2点でスコア化し、比較を行った。分析の結果、事件報道に共通した意見は、「事件が興味本位で伝えられている」「社会全体の治安悪化を感じさせる」「容疑者を犯人と決めつけている」「独自取材による報道が少ない」であった。また3つの事件のうち殺人事件のスコアが高い傾向にあることから、受け手の殺人事件への意見の多さが窺える。

本稿では、受け手のメディア利用の視座から、前掲の犯罪報道への意見にアプローチする。メデイ

4 新聞、テレビ、インターネットニュースのすべてを“長時間”利用すると回答したのは1名であった。

ア利用については前掲2. のカテゴリーを採用する（以下、カテゴリーは「層」と示す）。ただし、「読まない」「見ない」と回答した非利用者層の意見については、回答者が過去にメディアを利用した際に持った意見か、先有傾向による回答かの判断はつかない。

（1）殺人事件の報道への意見

殺人事件の報道については、「c 事件が興味本位で伝えられている」「n 社会全体の治安悪化を感じさせる」「e 容疑者を犯人と決めつけている」「g 独自取材による報道が少ない」「m 被害者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」でスコアが高く、他方、「m 被害者のプライバシーや人権に配慮している」はマイナス評価となった。

①新聞

「c 事件が興味本位で伝えられている」については、新聞の閲読時間にかかわらず、すべての層で高いスコアを示す。「n 社会全体の治安悪化を感じさせる」と「g 独自取材による報道が少ない」は30分以上の読者層で多くなる。「e 容疑者を犯人と決めつけている」は、「読まない」を含むすべての層で多い傾向にあるが、「1時間以上」の長時間読者層では低いスコアとなる（0.41、標準偏差0.733）。マイナス評価の「m 被害者のプライバシーや人権に配慮している」で、スコアが最も低いのは「読まない」層（-0.58、標準偏差1.056）で、以下、「30分未満」（-0.40、標準偏差1.056）、「1時間以上」（-0.17、標準偏差0.889）、「30分～1時間未満」（0.11、標準偏差1.044）と続く（図1参照）。

全体的にみるとすべての意見において、「30分～1時間未満」と「1時間以上」のスコアが高い傾向にあるが、長時間読者ほどその傾向が強くなるわけではない。他方、「読まない」はすべての項目で低いスコアを示す（図1参照）。

②テレビ

「c 事件が興味本位で伝えられている」は「2時間～4時間未満」（0.78、標準偏差0.837）、「2時間未満」（0.75、標準偏差0.904）、「4時間以上」（0.67、標準偏差0.877）の順でスコアが高い。スコアは低いけれども同様の傾向を示すのは、「g 独自取材による報道が少ない」で、「2時間～4時間未満」（0.60、標準偏差0.903）、「2時間未満」（0.42、標準偏差0.902）、「4時間以上」（0.50、標準偏差0.858）となる。なお、「e 容疑者を犯人と決めつけている」は、「2時間～4時間未満」と「4時間以上」のスコアが0.64（標準偏差は、0.816、0.759）と同じで、「2時間未満」（0.62、標準偏差0.834）が僅差で続くことから、視聴時間に関わらず共通した意見といえる（図2参照）。

他方、「n 社会全体の治安悪化を感じさせる」は、「4時間以上」が0.88（標準偏差0.862）、「2時間～4時間未満」が0.75（標準偏差0.888）、「2時間未満」が0.55（標準偏差0.914）、「見ない」が0.18（標準偏差1.172）というように、長時間視聴者層ほどスコアが高くなる。このように視聴時間とスコアが正比例する項目は、「k 被害者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」「h 被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「i 被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「d 事件の問題点や背景にせまって報じている」「b 事実を正確に伝えている」である（図2参照）。

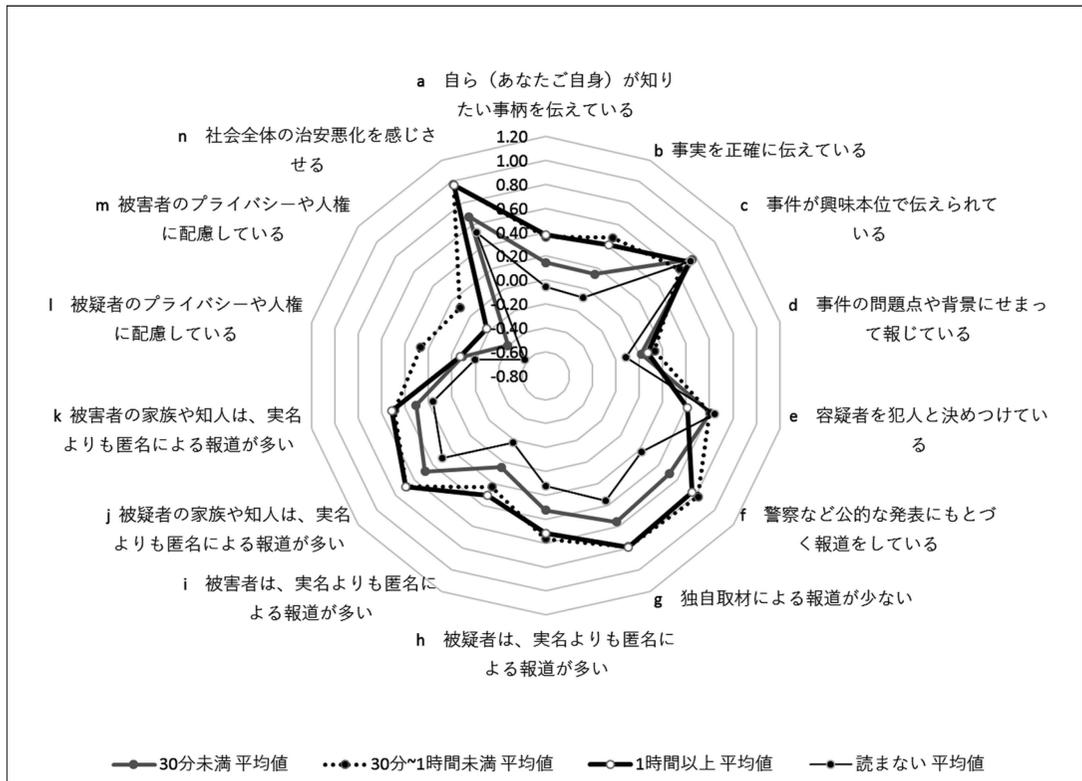


図1 新聞閲読時間別 殺人事件の報道への意見

マイナス評価の「m被害者のプライバシーや人権に配慮している」は、すべての層で評価が最も低い。なかでも短時間視聴者層でスコアが低い傾向にあり、「見ない」は-0.65（標準偏差1.087）、「2時間分未満」は-0.48（標準偏差1.073）、「2時間～4時間未満」は-0.35（標準偏差1.097）、「4時間以上」は-0.34（標準偏差0.982）の順となる。言い換えれば、視聴する層ほど、不十分（マイナス）ながらもプライバシーに配慮しているという意見をもっているということになる（図2参照）。

全体的にみると、「2時間～4時間未満」と「4時間以上」の長時間視聴者層は同じようなスコアの傾向にあり、長時間視聴者ほど評価が高いというわけではない（図2参照）。

③インターネットニュース

インターネットニュースの報道への意見をみると、「2時間以上」でスコアが高い傾向にある。まず共通する意見について、スコアが高い順に全体の傾向をみると、「c事件が興味本位で伝えられている」は1.04（標準偏差0.796）、「n社会全体の治安悪化を感じさせる」は0.73（標準偏差0.914）、「e容疑者を犯人と決めつけている」は0.85（標準偏差0.899）、「g独自取材による報道が少ない」は0.64（標準偏差1.058）となる。これらはすべて、利用時間が長くなるほどスコアが高い傾向にある。このほか、長時間利用者ほどスコアが高くなる意見として「h被疑者は、実名よりも匿名による報道が多い」があげられる（図3参照）。

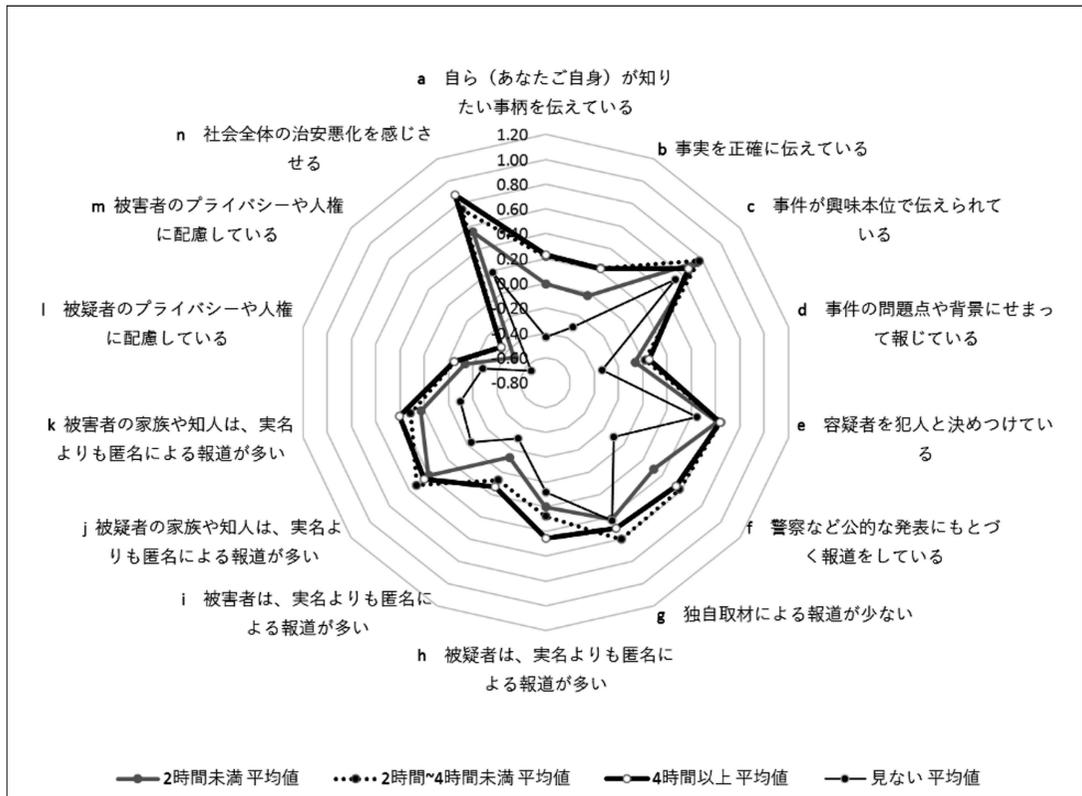


図2 テレビ視聴時間別 殺人事件の報道への意見

マイナス評価の「m被害者のプライバシーや人権に配慮している」は、「1時間～2時間未満」(-0.52、標準偏差1.101)でマイナス・スコアが最も高く、「30分未満」(-0.44、標準偏差1.018)、「30分～1時間未満」(-0.42、標準偏差1.118)、「2時間以上」(-0.38、標準偏差1.182)、「見ない」(-0.20、標準偏差0.905)と続く。このほかインターネットニュース利用者層全体でのマイナス評価の意見として、テレビと同じ項目「l被疑者のプライバシーや人権に配慮している」「i被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「d事件の問題点や背景にせまって報じている」があげられる。これらは前掲「m被害者のプライバシーや人権に配慮している」と同じく、「1時間～2時間未満」でマイナス・スコア(項目l:-0.23、標準偏差1.027、項目i:-0.13、標準偏差1.112、項目d:-0.11、標準偏差0.861)が最も高い(図3参照)。

そのほかの特徴として、「a自ら(あなたご自身)が知りたい事柄を伝えている」「b事実を正確に伝えている」は「30分未満」のスコアが高い。また「2時間以上」の利用者層は他の層に比べて、前掲の共通意見c、n、e、gに加え、「i被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「j被疑者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」「k被害者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」についても高いスコアを示す。特に、「c事件が興味本位で伝えられている」「i被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「j被疑者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が

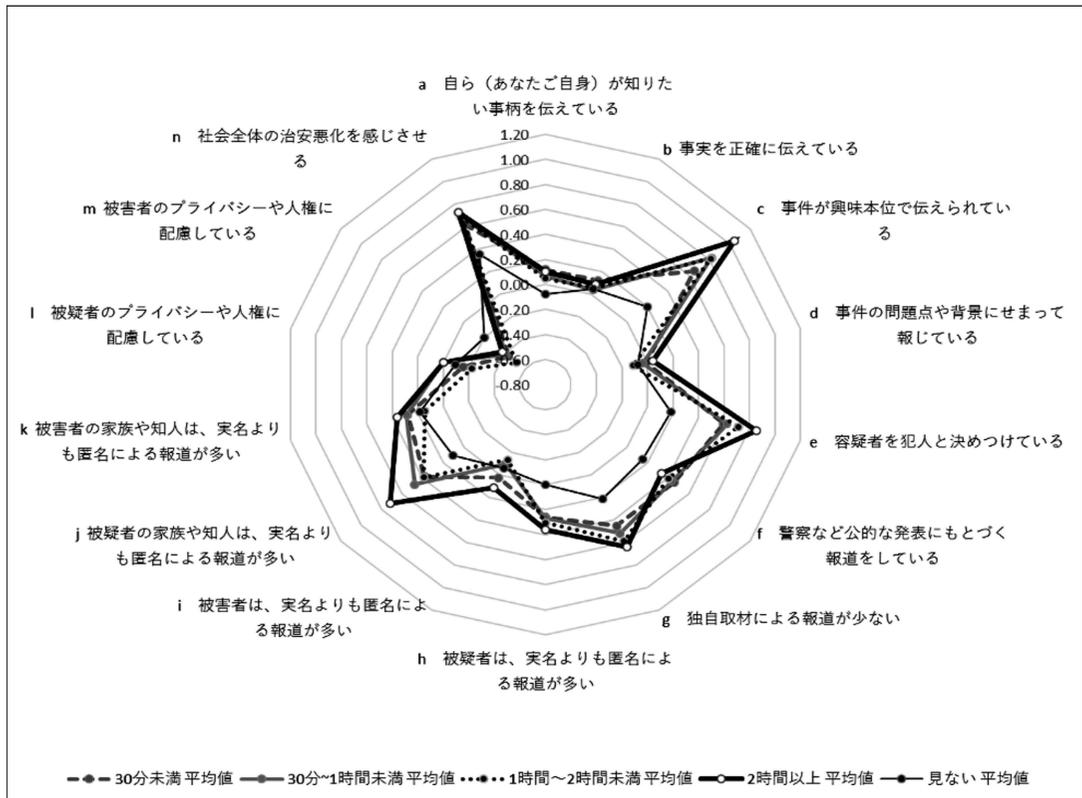


図3 インターネットニュース利用時間別 殺人事件の報道への意見

多い」に関しては、全体スコアの2倍となる高い数値を示す。他方、「見ない」層のスコアは総じて低く、インターネットニュースに対する評価の低さが窺える（図3参照）。

（2）性犯罪事件の報道への意見

性犯罪の事件報道については、「c 事件が興味本位で伝えられている」「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」「e 容疑者を犯人と決めつけている」「g 独自取材による報道が少ない」の順にスコアが高く、「d 事件の問題点や背景にせまって報じている」はマイナス評価である。

①新聞

「c 事件が興味本位で伝えられている」は、「読まない」を含むすべての読者層でスコアの差はない。「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」でスコアが高いのは、「30分～1時間未満」と「1時間以上」（ともに0.86、標準偏差は順に0.891、0.953）である。「30分未満」は0.75（標準偏差0.865）、「読まない」は0.57（標準偏差0.992）となり、読まない層は30分以上の読者層に比べてスコアが低い（図4参照）。

「e 容疑者を犯人と決めつけている」はpとは反対の傾向にあり、「30分未満」と「読まない」を合わせた読まない層でスコアが高く、それに対し、「30分～1時間未満」と「1時間以上」を合わせ

た読者層でスコアが低い。「g 独自取材による報道が少ない」は閲読時間が長くなるにつれてスコアが高く、「読まない」が0.40 (標準偏差0.878) に対し、「1時間以上」は0.86 (標準偏差0.693) と2倍を超える (図4参照)。

マイナス評価の「d 事件の問題点や背景にせまって報じている」については、読者間で大きなスコア差はみられないが、最もマイナス・スコアが高いのは「読まない」層である。

「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」に加え、閲読時間が長いほどスコアが高くなる意見は、「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」「h 被疑者は、実名よりも匿名による報道が多い」「i 被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」「j 被疑者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」「k 被害者の家族や知人は、実名よりも匿名による報道が多い」「m 被害者のプライバシーや人権に配慮している」であり、それらのすべてについて、「1時間以上」のスコアは「30分未満」のスコアの2倍を占める (図4参照)。

被疑者、被害者の報道について「1時間以上」層では、「l 被疑者のプライバシーや人権に配慮している」と「n 性犯罪事件の報道は被疑者に厳しい」はマイナス評価で、「o 性犯罪事件の報道は被害者に厳しい」のスコアも読者層の中で最も低い。新聞報道の内容分析の知見から、新聞報道において個人のプライバシーや個人情報想起する語や扇情的な語はあまりみられないことが明らかとなっており (四方由美ほか、2018)、この知見からも、長時間読者層による匿名報道が多いという意見や、被害者のプライバシーや人権に配慮しているという意見は妥当といえよう。新聞の性犯罪事

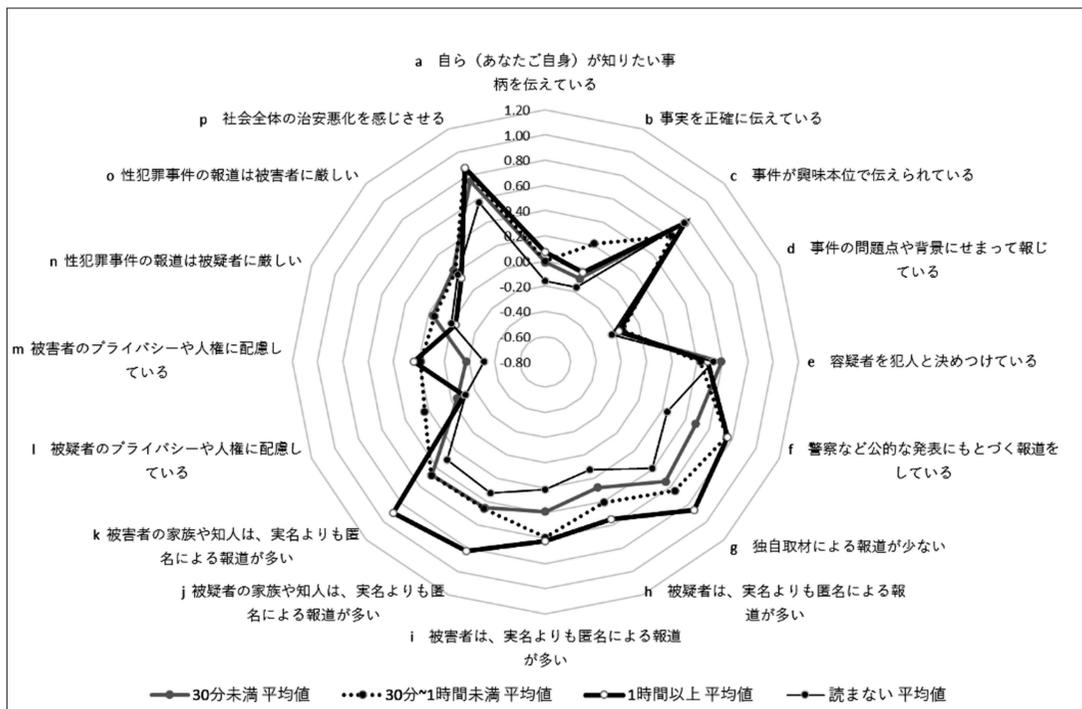


図4 新聞閲読時間別 性犯罪事件の報道への意見

件の報道への意見は、図4のとおり、読者層によって大きくスコアが異なることが特徴といえよう。

②テレビ

新聞では閲読時間が長いほど、スコアが高い意見が多い傾向にあったが、テレビの視聴時間が長いほどスコアが高くなるのは、「d事件の問題点や背景にせまって報じている」と「p社会全体の治安悪化を感じさせる」だけである。dは視聴時間が長いほどマイナス・スコアが低くなることから、全体的評価は低い、長時間視聴層で“事件の問題点や背景にせまって報じている”と評価しているといえる。またpのスコアからは、長時間視聴層ほど“社会全体の治安悪化を感じている”ということがわかる。なかでも「4時間以上」のスコアは0.78(標準偏差0.940)を示し、これは「4時間以上」のすべての項目において最も高いスコアとなる(図5参照)。

項目全体を通してスコアが高いのは「2時間～4時間未満」で、全16項目のうち9項目で高い数値を占める。そのうち「2時間未満」と「2時間～4時間未満」の2つの層で同じ傾向にあるのは、報道内容に関連する「c事件が興味本位で伝えられている」と「m被害者のプライバシーや人権に配慮している」(マイナス・スコア)、「o性犯罪事件の報道は被害者に厳しい」と「n性犯罪事件の報道は被疑者に厳しい」である。取材に関する「f警察など公的な発表にもとづく報道をしている」と「g独自取材による報道が少ない」の意見については、「2時間～4時間未満」と「4時間以上」が同じ傾向にある(図5参照)。

③インターネットニュース

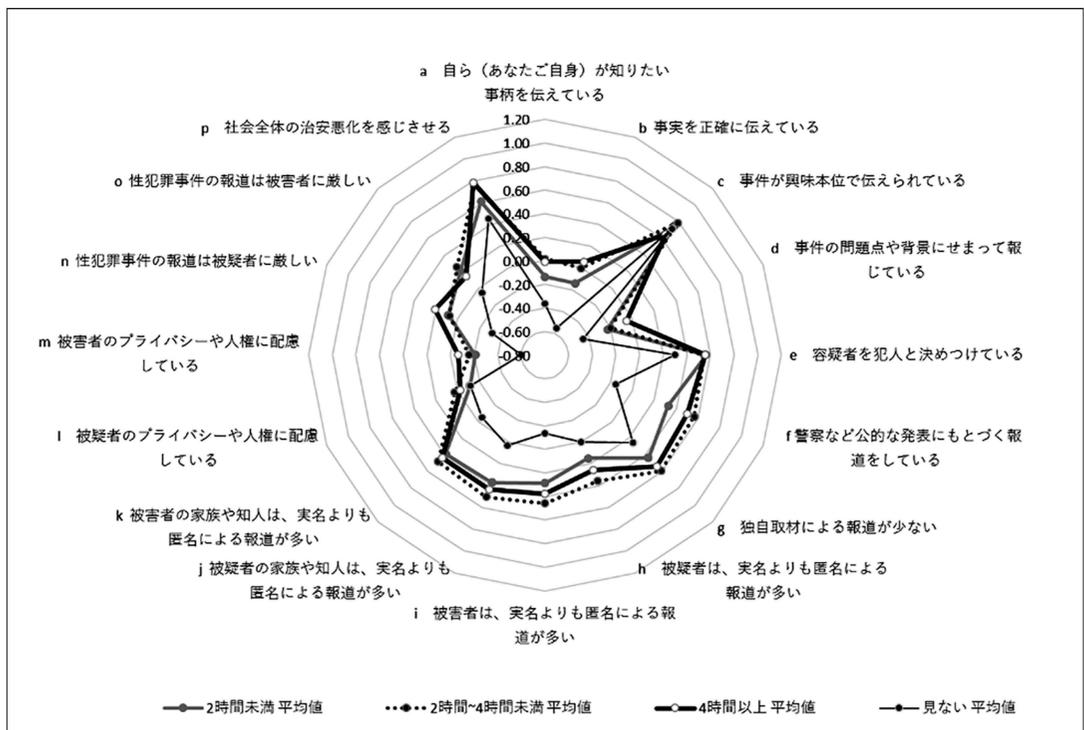


図5 テレビ視聴時間別 性犯罪事件の報道への意見

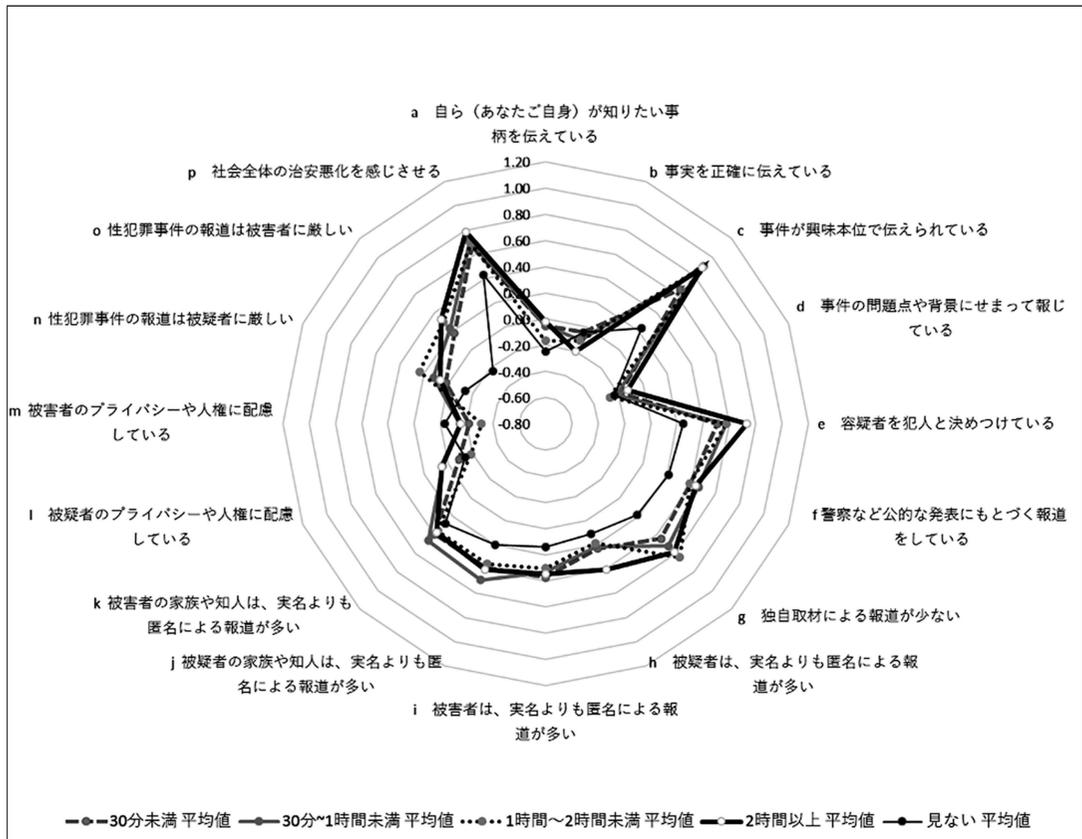


図6 インターネットニュース利用時間別 性犯罪事件の報道への意見

図6のとおり、「見ない」層については、新聞と同様にスコアは全体的に低く、インターネットニュースに対する評価の低さを確認できるが、そのほかの利用者層においては、利用時間と評価の間に関連はあまりみられない。以下では、性犯罪の事件報道で評価が高い意見についてまとめる。

「c 事件が興味本位で伝えられている」は、「1時間～2時間未満」(0.90、標準偏差0.915)、「2時間以上」(0.89、標準偏差0.832)、「30分未満～1時間未満」(0.85、標準偏差0.810)というように、30分以上の利用者で共通して高い評価となる。「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」は、利用時間に比例して評価が高くなっていることから、長時間利用するほど“治安悪化を感じる”ことがわかる。「e 容疑者を犯人と決めつけている」では、30分から2時間未満の利用者層では約0.5スコアとなっており利用時間によるスコアの差はないが、「2時間以上」になるとスコア(0.73、標準偏差0.863)が高くなる。「g 独自取材による報道が少ない」は、「1時間～2時間未満」(0.64、標準偏差0.904)が最も高く、「2時間以上」(0.58、標準偏差0.809)、「30分未満～1時間未満」(0.52、標準偏差0.851)、「30分未満」(0.44、標準偏差0.812)と続く(図6参照)。

マイナス評価の「d 事件の問題点や背景にせまって報じている」は、「1時間～2時間未満」(-0.27、標準偏差0.979)が最も高く、「30分未満～1時間未満」(-0.22、標準偏差0.901)、「30分未

満」(-0.18、標準偏差0.793)、「2時間以上」(-0.12、標準偏差0.915)と続く(図6参照)。

(3) 幼児虐待事件の報道への意見

幼児虐待事件では、「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」「c 事件が興味本位で伝えられている」「e 容疑者を犯人と決めつけている」「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」「g 独自取材による報道が少ない」のスコアが高いことから、これらの意見を中心にみていく。

①新聞

図7のとおり、「30分~1時間未満」の読者層で評価が高い。「30分~1時間未満」と「1時間以上」で同じような評価をしているのは、「c 事件が興味本位で伝えられている」「g 独自取材による報道が少ない」「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」の3項目であるが、スコアが高いのはすべて「30分~1時間未満」であることから、長時間読者ほどスコアが高いというわけではない。c、g、pの項目のうち、pのスコアは特に高く、「30分~1時間未満」は0.90(標準偏差0.947)、「1時間以上」は0.86(標準偏差0.875)を示す。

そのほかの意見について概観すると、「30分~1時間未満」のスコアは全体的に高いことから、「30分~1時間未満」の読者層では、匿名報道とプライバシーや人権への配慮について一定程度評価しているといえるだろう。他方、「1時間以上」の読者層は、「n 幼児虐待報道は父親(継父含む)に厳しい」と「m 幼児虐待報道は母親(継母含む)に厳しい」に対して高いマイナス・スコアを付している。これに関しては、幼児虐待報道が対象(父母等)に対して、受け手は厳しいと感じているのか、

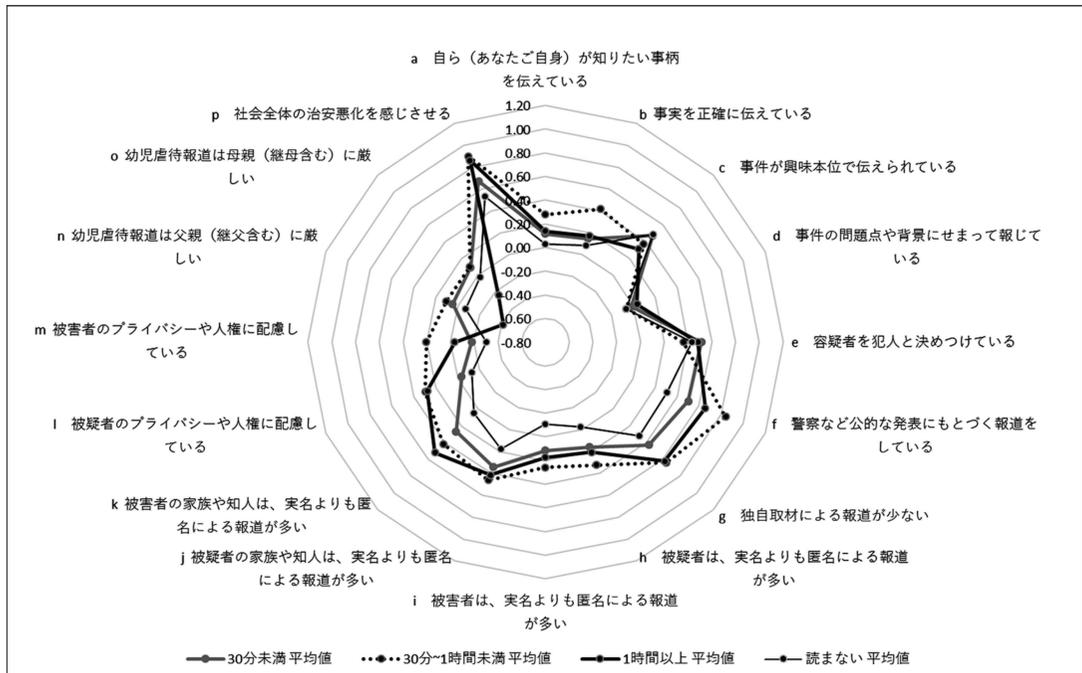


図7 新聞閲読時間別 幼児虐待事件の報道への意見

あるいは、より厳しくすべきと感じているのかの判断が難しい。

「読まない」層の評価は全体的に最も低いが、「c 事件が興味本位で伝えられている」について最も高いスコアがついている。これは「読まない」層の先有傾向として、興味本位を煽る新聞報道のイメージがあるのかもしれない。また、「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」のスコアは閲読者と比べると低いものの0.53 (標準偏差0.986) を示しており、新聞閲読の有無にかかわらず、“社会全体の治安の悪化を感じている”といえる (図7参照)。

②テレビ

「c 事件が興味本位で伝えられている」と「e 容疑者を犯人と決めつけている」への意見は視聴時間に関わらず同じ傾向である。また、「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」「g 独自取材による報道が少ない」については、「2時間～4時間未満」と「4時間以上」でスコアが高いことから、長時間視聴者層の取材への関心を表しているといえる。

「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」は、視聴時間が長くなるにつれてスコアが高くなる。「見ない」層のスコアは0.28 (標準偏差1.166)、「4時間以上」のスコアは0.84 (標準偏差0.902) であることから、テレビを長く見る人ほど“社会全体の治安悪化を感じている”といえよう (図8参照)。

③インターネットニュース

全体的に「2時間以上」のスコアが高い傾向にあり、「e 容疑者を犯人と決めつけている」「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」「g 独自取材による報道が少ない」でスコアが最も高い

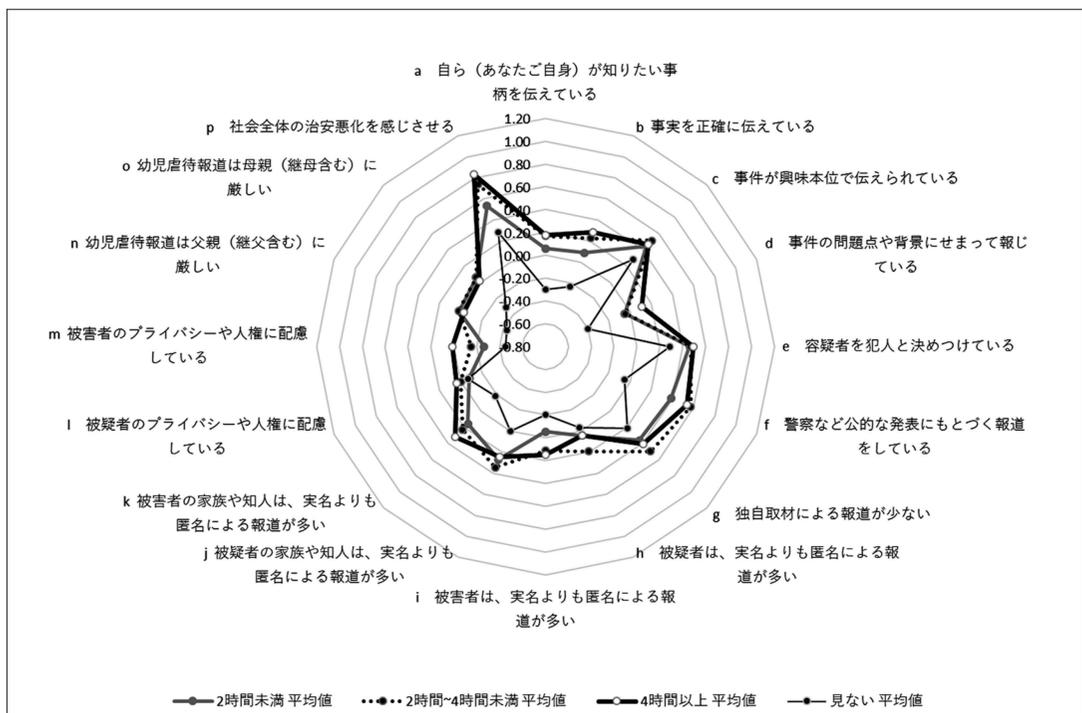


図8 テレビ視聴時間別 幼児虐待事件の報道への意見

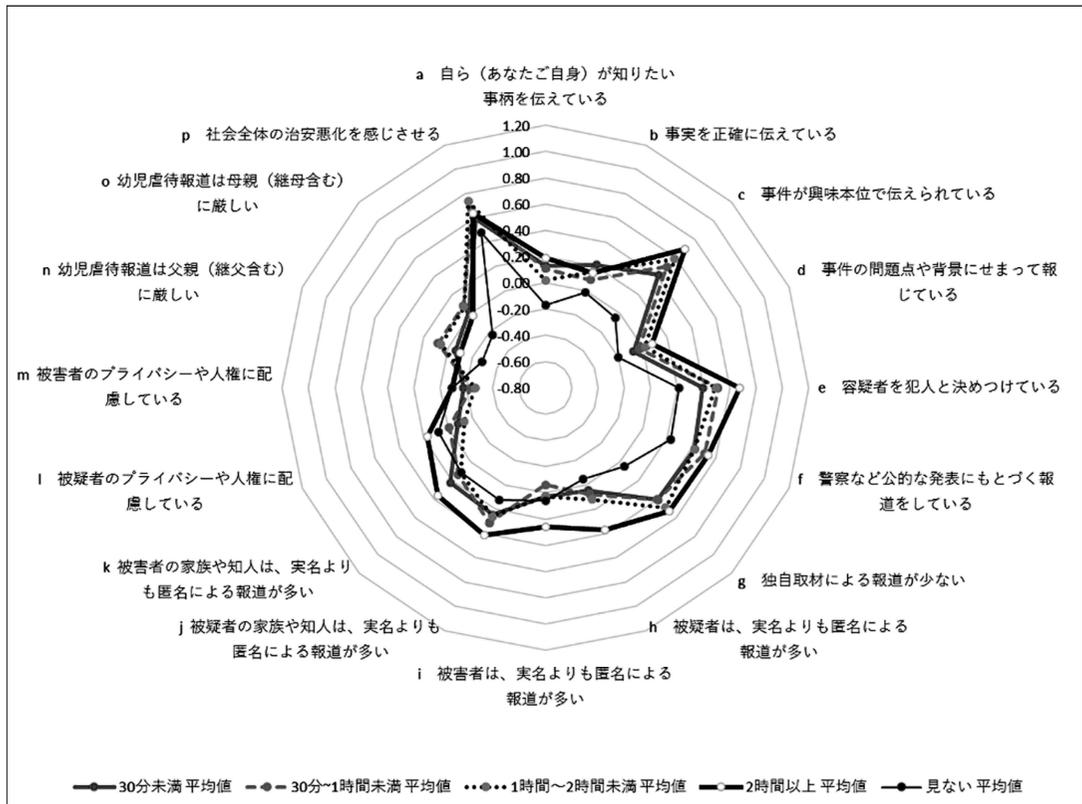


図9 インターネットニュース利用時間別 幼児虐待事件の報道への意見

のは、「2時間以上」となる。また、「c 事件が興味本位で伝えられている」は長時間利用者ほどスコアが高くなっており、「30分未満」のスコアは0.42（標準偏差0.828）に対して「2時間以上」は0.70（標準偏差0.858）であることから、利用時間が長い人ほど“興味本位な報道”を強く感じていることがわかる。「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」については、各利用者層でスコアが高い傾向にはあるが、「1時間～2時間未満」のスコアが0.74（標準偏差0.964）で最も高く、最も低い「見ない」層の0.48（標準偏差1.017）と比べてもその高さがわかる（図9参照）。

また図9から、「2時間以上」の匿名報道に関するスコアは高いが、他方で、プライバシーや人権に関する評価については総じて低いことがわかる。利用時間の長短にかかわらず、インターネットニュースのプライバシーや人権の保護について十分ではないと評価しているといえよう。

(4) 事件別の報道への意見

本節では、それぞれのメディアの行為者に限定して、事件別に多い意見についてメディア別にスコアを比較した。図10から図12はメディアの行為者別に各事件報道への主な意見をまとめたものである。

図10は殺人事件報道への意見を示している。「c 事件が興味本位で伝えられている」と「e 容疑者を犯人と決めつけている」はインターネットニュースでのスコアが高く、「g 独自取材による報道が

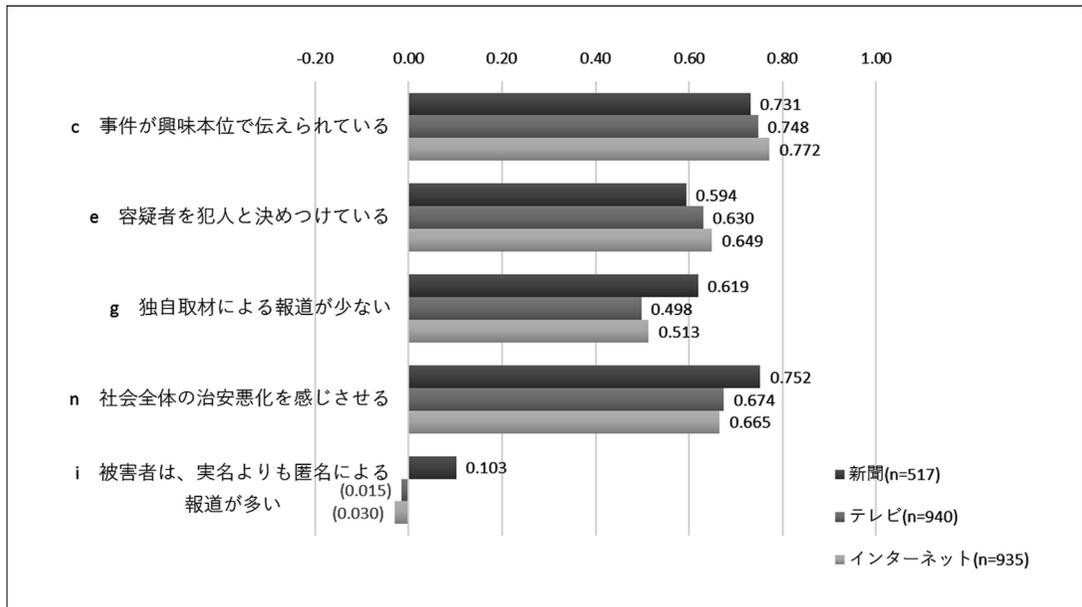


図10 メディア行為者別 殺人事件の報道への意見

少ない」と「n 社会全体の治安悪化を感じさせる」は新聞が突出している。「i 被害者は、実名よりも匿名による報道が多い」については評価がわかれ、新聞ではプラス、テレビとインターネットニュースではマイナスとなる（図10参照）。

図11は性犯罪の事件報道について示している。「c 事件が興味本位で伝えられている」「e 容疑者を犯人と決めつけている」「g 独自取材による報道が少ない」「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」については殺人事件の報道への意見とほぼ同じ傾向といえる。「d 事件の問題点や背景にせまって報じている」はマイナス評価であるが、インターネットニュースのマイナス・スコアは最も高く、評価が最も高いのは新聞である（図11参照）。

図12は幼児虐待事件について示している。幼児虐待事件の報道評価は前掲の殺人事件や性犯罪事件の評価と異なり、「c 事件が興味本位で伝えられている」と「e 容疑者を犯人と決めつけている」のスコアが低い。e の犯人視報道については2つの事件と異なり、新聞のスコアが僅かに高くなる。「p 社会全体の治安悪化を感じさせる」は2つの事件と同じく、新聞のスコアが最も高い。また、「f 警察など公的な発表にもとづく報道をしている」も新聞のスコアが高いが、f と関連する変数として「g 独自取材による報道が少ない」を参照すると、新聞が0.48（標準偏差0.806）テレビが0.42（標準偏差0.827）、インターネットニュースが0.43（標準偏差0.838）であり、大きな差はみられない。

前稿（大谷ほか、2019）において、人びとは報道によって社会の治安悪化を感じていることを指摘したが、今回の分析を通して、新聞の読者でその傾向が強いことが明らかとなった。また、興味本位な報道や犯人視報道についての意見はインターネットニュースの利用者で多く、殺人事件と性犯罪事件においては、新聞の独自取材の少なさが指摘されている。

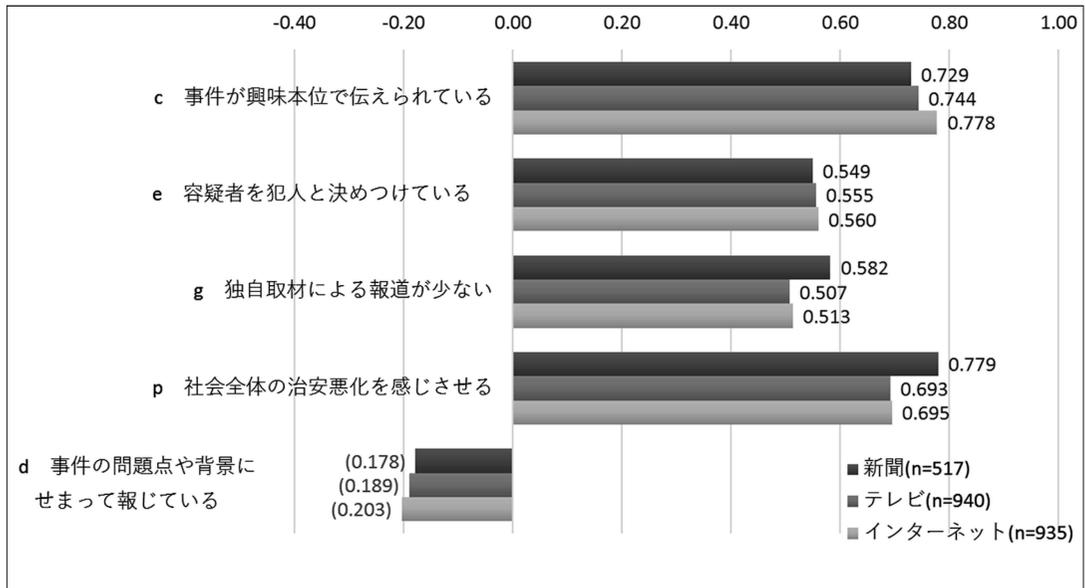


図11 メディア行為者別 性犯罪事件の報道への意見

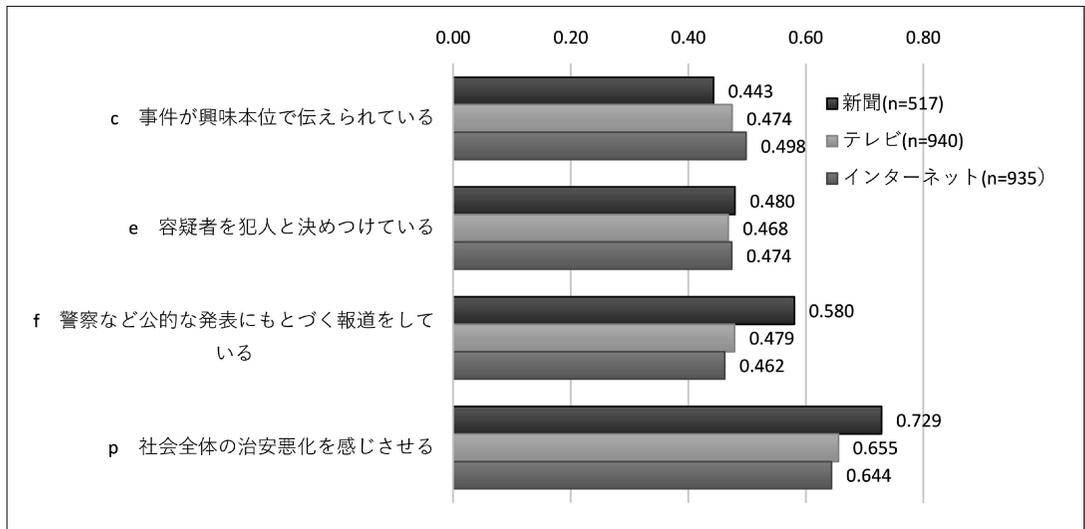


図12 メディア行為者別 幼児虐待事件の報道への意見

(5) 分析のまとめ

受け手のメディア利用による報道への意見について検討したところ、利用時間が長くなるにしたがって意見が多くなるのは、「社会全体の治安悪化を感じさせる」である。この意見に対して特に影響しているのは新聞であり、長時間閲読者ほどそう思う傾向が強い。そのほかは、事件と利用メディアによって意見が異なることから、共通項を見出すのは難しいが、興味本位を煽るような報道、犯人視報道のスコアは、新聞、テレビ、インターネットニュースの順で高いことから、新聞への評価が高

いことがわかる。他方、独自取材の少なさは、テレビ、インターネットニュース、新聞の順となる。調査対象者のうち新聞読者は約半数であるが、この結果は、新聞の影響力の大きさと、受け手の質の高い取材へのニーズを示しているといえよう。

4. おわりに

本稿では、受け手のメディア利用と報道評価との関連を探るために、各メディアの利用状況別に「犯罪報道への意見」を検討し、いくつかの結論を得ることができた。利用メディアおよびその利用時間ごとに「犯罪報道への意見」をスコア化することにより「受け手像」が明確になったといえよう。近年のメディア環境を鑑みると、新聞、テレビに加えてインターネットニュースを分析項目としたことにより、メディアの効果研究への今日的アプローチが可能になると考える。

なかでも、メディアの利用時間と犯罪不安の関連性については、従来からマス・コミュニケーション研究において探求されてきた点である。自身の置かれた環境をどのように認識するかということと、情報環境との関係については、W. リップマン (1922) の指摘までさかのぼる。この点について、今後本研究においてもより精緻化した分析を行いたい。マス・メディアの報道に対する信頼が揺らいでいると同時に、インターネットニュースへのアクセスが増化する現在において再考すべきと考える。

また、どのような報道内容が受け手の認識に影響を与えるかについては、G. ガーブナーが行った文化指標プロジェクトのうち「テレビのメッセージが、社会的現実に対する受け手の認識にどのような独自の影響をもたらしているか」(竹下俊郎2008:56)について明らかにする「培養仮説」の観点から検討することができる。本研究では、犯罪報道の内容(メッセージ)についても研究を行っているので、今回の受け手調査の結果に照らして検討することも今後の課題としたい。

《引用文献》

- 大谷奈緒子・川島安博・小川祐喜子・川上孝之・松本憲始・福田朋実 (2016)「犯罪報道の評価と犯罪不安」『東洋大学社会学部紀要』第54-1号: pp.57-68
- 大谷奈緒子・四方由美・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2019)「受け手による犯罪報道への評価」『東洋大学社会学部紀要』第56-2号: pp.125-136
- 阪口祐介 (2008)「メディア接触と犯罪不安:『全国ニュース』と『重要な他者への犯罪不安』の結びつき」『年報人間科学』29-2: pp.61-74
- 四方由美・大谷奈緒子・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実 (2018)「犯罪報道の共起ネットワーク分析(1)」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻1号: pp.63-80
- 竹下俊郎 (2008)『増補版 メディアの議題設定機能——マスコミ効果研究における理論と実証』学文社
- 牧野智和 (2012)「犯罪報道研究の現状と課題」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-1: pp.13-24
- Gerbner, G. & Gross, L. (1976) "Living with television: The violence profile." *Journal of Communication*, 26 (2)
- Lippmann, W. (1922) *Public Opinion*, Macmillan. (=1987, 掛川トミ子訳『世論』上下巻、岩波文庫)

【Abstract】

Audience Evaluation of Criminal Reports（2）

Naoko OTANI
Yumi SHIKATA
Makie KITADE
Yukiko OGAWA
Tomomi FUKUDA

Little research on audience influence has been done with regard to studies of criminal reports. Our research group has been studying criminal reports from the following three perspectives: 1) Quantitative analysis of media content, 2) audience research, 3) media sender research. We have framed this study as 2) audience research.

This paper examines audience evaluation of criminal reports in newspaper, television, and internet news site, empirically studying the correlation between media usage and audience evaluation.

As a result of this audience research, we concluded that the more respondents read newspapers, the more anxiety they have regarding current society. Audiences have high expectations of newspapers regarding news coverage.